

第十一章 保守合同へ

古田茂の『抜打ち解散』による衆議院総選挙で、自由党内の吉田派と鳩山派は血で血を洗う争いを演じた。党内紛争に加うるに吉田長期政権への批判から、自由党は二百四十名と過半数は確保したものの、解散前議席の二百八十五名から、四十五名減少した。野党は、改進黨が六十七名から八十五名、左派社会党が十六名から五十四名へと躍進し、右派社会党が三十名から五十七名へとこれも躍進した。過激すぎる運動のために国民の反発を買った共産党は二十二名から一挙に議席ゼロに転落した。

追放解除組の当選者は百三十九名、その中には鳩山一郎、緒方竹虎（自由党）、重光葵（改進黨）、河上丈太郎（右派社会党）、久原房之助（無所属）等の『大物政治家』が含まれていて、戦後民主政治の一つの転換点となった。

保守党内部の対立抗争はいっそう深まり、それは、昭和三十年十一月の保守合同まで絶えることなくつづいて行く。

まず選挙後の首班争いである。もともと鳩山にしてみれば、吉田には追放の間だけ党総裁の椅子を渡してあつたつもりで、政界復帰が成れば、当然、総裁に返り咲く心づもりをしていたから、吉田に全くその気がないことに腹を立て、強く吉田首班に反対したが、吉田・鳩山会談が成立し、昭和二十七年十月三十日、第

四次吉田内閣が誕生した。しかし、吉田が鳩山派を一名も入閣させなかったため、鳩山派は吉田が約束を無視したと憤激し、党内に「民主化同盟」を結成した。三木武吉に率いられた「民同」には、吉田や執行部に反感を感じるものが結集し、不穏な動きを示した。

そこへ生じたのが、この時の組閣で蔵相から通産相に横すべりしていた池田の中小企業放言の追認である。

昭和二十七年十一月二十七日の衆議院本会議で、右派社会党代議士の質問に対して池田は、「この過渡期におきまして、迷惑その他の、普通の原則に反した商売をやられた人が、五人や十人破産せられることはやむをえない お気の毒ではありますが、やむをえないということをはっきり申しておきます」と述べた。これは、理屈の上ではそのとおりであっても為政者として口にすべき言葉ではなかったが、再質問にこたえて再び同じ趣旨の答弁をしたところにたんなる失言とは言えない、池田の池田らしさがあつた。

これが国会で問題にならないわけではない。野党は翌日、全野党共同で池田通産相の不信任案をつきつけ、自由党内民同派の二十五名が欠席して、不信任案は二百八票対二百一票で可決された。代議士当選以来、四年間、蔵相、通産相と陽の当たる場所にいつづけた池田は、一転して無役となった。

翌昭和二十八年一月二十五日の自由党大会では、民同派の圧力で吉田は腹心の佐藤栄作の幹事長任命を延期せざるをえなくなった。この問題は鳩山内閣実現の推進者である三木武吉が総務会長となることと抱合せで一応の妥協が成立したが、以後吉田は政策も人事も総務会を通さなければ決定できぬようになってしまった。

つづいて二月二十八日、第二の不運が吉田内閣を襲った。衆議院予算委員会において右派社会党の西村栄一が国際情勢に関する吉田の見解を求めて執拗に食い下がり、米英の首脳の見解の「ホンヤク」ではなしに「日本の総理大臣の意見が聞きたい」と迫った。吉田はよほどムシの居所が悪かったものらしい。ついに、西村をにらみつけて「無礼だ」と言い、さらに「バカヤロー」とつぶやいた。

この失言は、野党に絶好の攻撃の機会をあたえ、三月二日の衆議院本会議には、予算案の議決に先立って、「首相懲罰」という空前の動議が出され、自由党民同派と広川派の欠席によって、賛成百九十一票、反対百六十三票で成立してしまふ。

吉田はただちに広川農相を罷免したが、三月十四日には、さらに野党から吉田内閣不信任案が上程され、これまた二百二十九票対二百十八票で可決されたため、吉田はただちに解散に踏み切った。世にいう「バカヤロー解散」である。

民同派の中心だった三木武吉は、わずか半年前に総選挙を行ったばかりの吉田が解散に踏み切ることはなかるうと考え、広川派を抱きこんで内閣不信任決議案を成立させれば、吉田は退陣せざるをえなくなり、鳩山政権が実現すると考えていたので、これは三木の大誤算であった。

三木、広川らは解散後、自由党から除名され、鳩山をかついで新党を結成し、同じ「自由党」を名乗ることとなった。世間ではこれを「鳩山自由党」とか「分自党（分党派自由党）」とか呼んだ。

この「バカヤロー解散」は、占領中の昭和二十三年十二月、総司令部の示唆で行った「なれあい解散」について二度目の内閣不信任案可決による解散である。そして、三度目は、のちに述べることになる昭和十五年五月の第二次大平内閣の時のことである。大平は、内閣不信任案可決という異常事態を、奇しくも代議士一年生の時点で体験したのであった。

「同日の夕刻、大野伴睦議長によって、『憲法第七条により衆議院を解散す。御名御璽』という詔書が読み上げられた。一瞬にして、全代議士の議席は剥奪されることになってしまったのである。

このことは私にとって、文字とおり青天の霹靂であり、無情な仕打ちでもあった。当選以来、院議に従って年賀状も出さず、選挙区と没交渉に終始していた私は、全く当惑してしまった。政治というものが、かくも非情残酷なものであることを痛いほど思い知らされた」。

この大平の第二回目の選挙を知っているものは誰しも口を揃えて「あれほど苦しかった選挙はなかった」と言う。なにしろ、香川二区は定員三人なのに、自由党が三人、社会党が三人、改進黨が一人、共産党が一人、無所属が一人と計九人が乱立したのである。

この第二十六回衆議院議員総選挙は、三月二十四日公示、四月十九日投票で実施された。大平陣営にしてみれば、はじめての選挙で誰しも無我夢中でたまたかかったため、その後遺症も癒えておらず、代議士として当然行すべき地元での国会報告会もやっていないという状態であるうえ、資金も全く準備できていなかった。

選挙も終わりの頃の四月初めに、ようやく橋本竜伍前厚生大臣が応援にきてくれたが、連絡の体制が悪くて駅に出迎えに出るものがない。心配した橋本のすすめで、志げ子夫人が、遊説中の高知まで吉田を迎えに行くことがやつと決まった。志げ子夫人は、「吉田総理の歓迎準備が心配になって、高知から観音寺の選挙事務所に電話したところ、会場もろくなものをとっていない、出迎えの仕度もできてない、あれもしていません、これもしていません、という返事でした。これは大変なことになった、と思い、吉田さんは気に入らないと帰ってしまう人だと聞いていたので、全く生きた心地がしませんでした」と語っている。

急遽用意された上高野小学校に吉田の演説会の準備ができたころ、満開の桜の下には立錐の余地もないほど人が集まった。緋毛氈を敷きつめた両側には消防団員が繰出で出迎え熱狂的な歓迎をしたので、吉田総理はすっかり気をよくし、予定の十五分を大幅にオーバーして、四十五分間も熱弁をふるった。このときの応援演説で、吉田首相が、大平候補を「オオダイラ君、オオダイラ君」と呼んだことは、いまでも一口話となっている。

当時の模様を大平陣営の選挙事務所が試みた情勢分析がいまでも残っている。

「……四万は確実に獲得する自信を得た。……人物本位に帰着する我が候補の至誠の人大平、信用のできる大平、財政経済に長ずる大平、是非とも当選せしめ度いと厚き自由党の信用がすぐる吉田首相一行の来援

によつて明らかに立証され、益々当選に一層拍車をかけた……」。

しかし、四月十九日の投票日の翌日、開票状況は決して大平に有利ではなかった。事務所からは人の影が一つ減り二つ減りしていった。三位争いをしている松浦陣營では、夕方バンザイの声が上がったが、翌日になつて大平が巻き返し、ようやくにして勝利を我がものとした。

次点との差はわずかに千百四十三票であつた。

この選挙は、定員四百六十六名に対し、吉田自由党百九十九名となつて過半数を大きく割り、分党派鳩山自由党は三十五名、改進黨は七十六名、左派社会党は七十二名、右派社会党は六十六名、このほか労働党五名、共産党一名、諸派一名、無所属十一名という結果となつた。左右社会党が増加し、保守系はいずれも後退した。自由党所屬の一年生議員は、五十六人中半分の二十八人が落選するという苦戦であつた。吉田自由党は過半数を割つたので改進黨との提携をはかつたが、同党は是非々々主義をとると称してこれを拒否、吉田はやむなく少数単独政権をつくることとなつた。

五月二十一日、第五次吉田内閣は発足したが、これが吉田長期政権の最後の内閣となる。

代議士二年生の大平は、農林常任委員から大蔵常任委員にかわり、自由党幹事、青年部副部長となつて、いよいよ本格的な国会議員生活に入ることになつた。と言つても、まだほんの陣笠で、もっぱら地元の話が中心であつた。

大平は代議士生活をこう描いている。

「……金のことをいえば、これほど金のかかる商売はない。何か吉凶禍福があり、それが自分と何等かのかかわりがあるとなると花輪の一つも用意しなければならぬ。何か人の集る行事があるのを聞き込めば、祝電を出したり場合によつては優勝旗やカップを寄贈したり、祝酒の二、三本を贈らねばならない場合があ

る。……郷里に帰れば事務所の家賃、電話代、自動車賃をはじめ宣伝費、会場費などが待っている。

……東京においては、毎日平均して十数人の来客がある。その多くは何かの要務をもって地元から出てこられた人々である。食事時になれば、たとえ粗末な食事でも差し上げるのが礼儀である。あの人にはお茶、この人には食事というわけには行かない。山程積まれた仕事を一つ一つ片付けていくには電話ばかりで足りないの、自ら出かけなければならぬ。……秘書一人では到底仕事がさばけないので、東京現地を通して二、三人の人に手伝ってもらわなければやって行けない。

……子供が東京に行くので、入学の世話はできないが、幸に入学できたが下宿はないか。卒業期が迫ってきたが手頃の就職口の斡旋をしてもらいたい。……酒屋、タバコ屋の免許を心配しろという。これにも尽せるだけの手を尽さねばならないが、一つの成功はそれに数倍する敵を作ることになりかねない。河川、道路、街路、港湾、漁港、溜池、用水等の改良や改修、学校の新築改築、水道工事、保育所の設置、タバコ収納所の買収や新築、植林、国立公園の認定、電気事業、その他に伴う補助金や起債の獲得という公共の仕事には、はじめて代議士としての誇りと責任を純粹に感ずるが、この仕事として予算の制約の下、決して案ではない。

税金が高すぎる、代理販売権を取れ、金融の斡旋をしる等はよいとしても、この品物の売り込みに協力せよ、この争いを調停しる等の注文にはいささか閉口する場合もある。朝は七時頃から電話が次々とかかる。夜は十二時過ぎまで呼び出される。ともかく一人の能力に数倍するサーヴィスが代議士には待っている」。

また、大平は、この頃、練馬区仲町（現錦一丁目）に家を借りて、『西讀寮』と名づけ、郷里から出てくる学生たちに開放した。三百坪ほどの敷地に、三棟の家が建っているものだったが、運営は学生たちの自主管理とした。寮長のほか、寮母がいて食事の世話をしていたが、三食付きで食費の他はすべての経費は大平が負担した。この寮はやがて古くなって建て直す必要に迫られたが、家主の諒解が得られず、昭和三十五年に廃止された。

昭和二十八年の夏は中央気象台開所以来の猛暑で、八月二十一日には東京では三八度四分を記録した。大平は、暑さの中で繁忙の合間をぬいつつ、原稿用紙にせっせとペンを走らせた。それは、十月二十日、大平の政界進出満一周年を記念し、『財政つれづれ草』と題して出版された。この本は、大平自身の半生を描いたもので、「自序」には、「これは、私を廻る多くの先輩・知己・同僚に対して、私の内面の消息の一端を伝える鳩であってほしいと思っているが、同時に財政についての断想や寸見に対する大方の高評を仰いで、自らの眼識成長の起点にしようという素志に出たものに他ならない」と記され、内容は、「農村小話」、「官僚回顧」、「財政断想」、「国会への道」、「アメリカの点描」の五章から成っている。この著書は、約二年後に加筆訂正を加えられ、新たに書きおろされた「人物観賞」と合わせ、『素顔の代議士』と改題して、昭和三十一年一月に出版された。

政局はますます混沌の度を深めて行った。過半数に達しない吉田自由党は、鳩山自由党の復帰工作をねばり強く進め、十一月二十九日には鳩山一郎ら二十三名が復党した。三木武吉、河野一郎が残った八名は日本自由党を結成した。

吉田は、自由党がようやく過半数に近い勢力になったことを喜んだが、昭和二十九年の正月早々大事件が待ちかまえていた。いわゆる『造船疑獄』である。一月七日に山下汽船が検察当局の捜査を受けたのに端を発し、取調べは運輸省、船主協会、造船工業界から政界に進んだ。

容疑は佐藤栄作幹事長、池田勇人政調会長にも及んだ。最高検察庁は、佐藤幹事長逮捕について衆議院に許諾を請求することを決定したが、四月二十一日、犬養健法相は、吉田首相、緒方副総理と協議の上、検事総長に対する指揮権を発動して、逮捕を行わないよう指示、佐藤は逮捕を免れた。その後は任意捜査に切り換えられたので犯罪の立証が困難となり、事件はうやむやのうちに終わることになる。

大平は窮地に陥った池田の無実を信じつつも、池田に司直の手が及んだことを聞いて信濃町に駆けつけ、「もう政治家をやめてください。私もやめます」と池田を涙ながらにかきといた。そういう大平について、池田満枝夫人は、「大平さんは、どこか、もろいところがありません」という印象をもらしている。大学卒業当時、自分の短所として『感情二才ボレ易イ』と書いた彼には、たしかにそのような面があったのである。いずれにしても、吉田の指揮権発動は世論の非難攻撃的となり、吉田内閣の命運はもはや風前の灯だった。指揮権発動直後の四月二十八日、自由・改進黨内連携派によって「新党結成促進協議会」が結成された。

こうした動きを不満とする吉田は、七月、池田を自由党幹事長に任命して、その辣腕で事態の乗り切りをはかるうとしたが、国民は時代の転換を求めており、池田の力をもってまいかんともなし難かった。九月末、吉田の外遊中に、鳩山を委員長とする「新党結成準備会」が発足したので、池田はその旗頭をつとめた岸信介と石橋湛山とを幹事長の権限で除名したが、これに対して準備会側は、吉田帰国の前々日の十一月十五日、新党創立委員会を開き、ついで鳩山系議員が衆議院から三十五名、参議院から二名離党した。こうして、改進黨、除名された岸派、および日本自由党（鳩山自由党）が合同して、十一月二十四日、反吉田を旗印とする日本民主党が結成された。総裁はむろん鳩山である。

十一月三十日に召集された第二十回臨時国会の衆議院の構成は、自由党百八十五にたいし、日本民主党百二十、左社七十二、右社六十一であったから、野党三党だけで過半数をはるかに超える。これでは野党の内閣不信任決議案は可決が必至であって、選択は解散か総辞職以外にない。吉田はあくまで解散を行う決意だったが、肝心の自由党内にも解散反対の声は強く、形勢は決定的に吉田に不利となった。解散を強行するなら吉田総裁の解任をも辞さない、という党内の大勢に直面して、十二月七日早朝、吉田もついに説得に依じて退陣を決意し、不信任決議案が上程される前に総辞職し、総裁の椅子を緒方竹虎副総裁に譲った。

翌々日の首班指名では、緒方と鳩山の競合となり、社会党がキャスティング・ボートを握ったが、左右両派ともに、『吉田の後継者には政権は渡さぬ』として、鳩山が首班に選ばれた。十二月十日、第一次鳩山内閣が発足した。

吉田の長期政権に倦んでいた国民は、鳩山内閣の出現に好感を寄せた。翌三十年二月二十七日に行われた第二十七回衆議院議員総選挙で、日本民主党は、憲法改正、自主防衛体制の整備、中ソとの国交回復などを掲げてたたかった。その結果、過半数（二百三十四）には及ばなかったものの、百八十五名が当選し、五割以上議席を伸ばした。それにひきかえ、自由党は議席を百十二に減らし、第二党に転落した。この選挙の直前に両社統一決議を行っていた左右両派社会党は順調に票を伸ばして、合計二十一議席増の百五十六をとり、両派社会党だけでも改憲阻止に必要な三分の一の議席を確保した。

大平は、前回と同じく三位だったが、票数を約一万票伸ばして四万八千八百五十一を確保した。

第一党とはいえ過半数を持たぬ第二次鳩山日本民主党内閣は、国会運営に悪戦苦闘した。とくに鳩山は、本会議や委員会で徹底的に責めたてられ、多くの法案が流れた。鳩山内閣実現のために奔走してきた三木武吉も、これを見て、四月十二日、政局安定のためには保守合同が必要だが、その際首班には固執しないと語るまでになった。これにつづいて、日本民主党から岸信介幹事長と三木武吉総務会長、自由党から石井光次郎幹事長と大野伴睦総務会長が出てその推進に当たることとなった。六月には鳩山・緒方会談が実現して、保守合同の機運が一挙に盛りあがった。だが、池田、佐藤がひきいる吉田派はこの動きを必ずしも快く思わなかった。たとえ少数派となっても孤塁を守ろうという意見も出て、派の態度はなかなか決まらなかった。当時の状況について、大平は後年次のように書いている。

「三木さんは高松の出身で、同郷の私に親近感をもっており、私が池田勇人の側近であることも十分に勘定に入れて、私との接触を強めてこられた。三木さんの求めによって、牛込山伏町のお宅を訪ねると、……

「保守勢力を合同させて、衆参両院で三分の二以上の議席を確保し、現行の『占領憲法』を改正する。そうしないと、自分は死ぬに死ねない」といわれるのであった。

……三木武吉・池田勇人両氏の会談は、その年の夏から秋にかけて、私の斡旋で何回も行われた。場所は築地の『栄家』であった。しかし、両氏の話はじっくりかみ合つところまではいかなかつた。

……ある日の朝、私は三木さんから一つの伝言を頼まれた。それは「今日の新党促進協議会の常任委員会では、できたら池田君は何も発言しないようにしてもらいたい。自分がそういうお願いをしておつたということ伝えてくれ」というのであった。私は正直にそのことを池田さんに伝えたが、池田さんは黙って聞き流しておられた。当日の委員会は、そんなに時間がかからなかつた。その日、私は衆議院の食堂脇で三木さんと会つたが、三木さんは「ありがとう。うまくいったよ」といわれた。

池田と三木の連絡役として奔走した大平は、この年十月、地元で開かれた国会報告会で、三木武吉について次のように語っている。

「……今次の保守合同に取組んでおられる三木さんは、生命がけであり、真剣であると思います。俺は最早先が短い。もう総理大臣になろうとも思わない。唯この三木は、死ぬる前に、一つええことをして死にたい」と三木さんは口癖のようにいっている。そういえば、あの骸骨のような体躯をもつて、おかゆをすすりながら、肩で息をしている三木さんである。「先が短い」といわれることに嘘いつわりはないと思います。また一つええことをして国家と国民に奉じたいと念慮することも、人間三木の自然の人情であろうと思われます。……その証拠に、保守合同という一つのともしびは消えなんとしても消えることなく、その燃焼をつづけているではありませんか。私は率直にいつて、三木さんの憂国の至情に敬意を表すものであります」。

新党結成の話は次第に煮つまつて行つたが、総裁を誰にするかという点になると、日本民主党側が話し合いて鳩山を、自由党側が公選を主張して、なかなか話し合いがつかない。ところが、十月十三日には同じく

合同を目指す会議をつづけていた左右社会党が、統一大会の開催にこぎつけてしまった。それに刺激された民主・自由の両党は、幹事長と総務会長の四者会談で、翌年四月に総裁選挙を行うこととし、当面は『総裁代行委員制』という窮余の策をとることで合意が成立し、新党の結党大会を開くこととした。総裁代行委員には、鳩山、緒方、三木、大野の四名が推された。池田、佐藤らの吉田派はギリギリまで態度を保留したが、大勢には逆らえず、吉田茂、佐藤栄作ら数人を除いて、ついに参加を決意した。

こうして十一月十五日、保守新党『自由民主党』が結成された。幹事長が岸信介、総務会長は石井光次郎、政調会長は水田三喜男であった。

保守合同の結果、政界地図がぬりかわったので、鳩山内閣はいったん総辞職し、十一月二十二日に第三次鳩山内閣が成立した。新総裁の選挙は、鳩山、緒方の間で争われることが確実となり、その成り行きは予断を許さなかったが、明けて三十一年一月二十八日、緒方が急死し、これによって鳩山の総裁就任が決定的となり、四月五日の党大会で四百八十九票中の三百九十四票を得て初代総裁が誕生した。吉田派はそろって白票を投じた。

大平が政界に進出してから保守合同までの三年、それは、その後の日本政治の方向を決する決定的な時期であった。この頃の議会政治のあり方を、彼はどのように見ていたのであるうか。保守合同の一カ月前に大平が記した文章がある。

「昭和二十七年四月二十八日、わが国は漸くにして独立を恢復し、主権者たる国民の手にわが国の政治がかえってきたのであるが、独立恢復後における議会のあり方には、多くの人の失望を招く節々が多い。……白昼公然暴力が横行したり、議会政治を守るべきかどうかについて深刻な議論をしてみたり、戦術的に利用すべき場所としての議会の効用しか考えていない政党もある始末である。

……朝から夜まで検事局のように政敵をしぼり上げる新しいマッカーシズムの場となってみたり、行政府

の行動の善の上げ下げにまで干渉するといつような行き過ぎを敢えてしてはばからないわが国の国会である。

白亜の殿堂と赤いじゅうたんは、かかる国会のあり方に、心ある国民と共に、半ば失望をさえ感じているに違いないであろう。議会政治の危機が叫ばれる所以である。しかし、私は決して失望してはいない。『ローマは一日にしてならず』といわれる。議会は必ず年と共に成長するであろうし、また成長させなければならぬ。

……権力者のなせる事が、『国民に知らしむべからず奇らしむべし』とする封建政治や独裁政治の下にある国民程憐れなものはない。路傍の石まで叫ぶという公明な喧騒の中に、眞実はえぐり出され腐敗は阻止されるのである。国家の運命から個人の生命財産に至るまでが誰かの手によって朝露のようにあしらわれるのはたまつたものではない。議会政治を通してそれが各人の諒解の下に処理されるわけである。議会政治は、どんなに低く評価してみても最悪の事態をさける効能はもっている。そこに安全と自由と清潔が生き残る唯一の場があるのである。議会は民衆の心を映す鏡であるからである。』

保守合同と左右両派社会党の統一によつて、日本の政治は、戦後の混迷に一つの終止符を打ち、二大政党制による議会政治が確立したかに見えた。議席の数から言えば、二大政党ではなく、一と二分の一政党制であつたが、当時の社会党の急伸びりは、やがては同党が政権の座につくことが可能であることを示すように見えた。したがつて、人々は、イギリスの議会のように保守と革新の政権交代が行われる時代がくるものと考えたのである。マスコミは、そういう期待をこめて、この年（昭和三十年）が西暦で一九五五年であるところから、『五十五年体制』と呼んだ。社会党のみならず、保守政党の幹部にすらそういう見方をするものが多かつたのである。